

(研 究)

明治以後のインドに関する邦文文献について —『インド書誌』編纂にまつわるいくつかのこと—

松 本 脩 作

(大東文化大学非常勤講師)

はじめに

以下は2007年6月15日の経済資料協議会総会で行った報告「『インド書誌』編纂と主題書誌作成の課題」に加筆したものである。

筆者は2006年3月に『インド書誌 明治初期～2000年刊行邦文単行書』（以下『インド書誌』と略）を上梓した。¹⁾ 本稿では地域研究 (Area Study) の視点から文献を探索する過程で見られたインドに関する文献特有の傾向を概観し、さらに現在のインターネット時代に文献情報をほとんどの研究者や図書館員がオンラインデータベースから得る状況にある中で、冊子体の主題書誌を編纂・刊行する意味について、いくつか考えたことを報告したい。

(1) 『インド書誌』の構成と内容

この書誌を作成した主たる目的は、明治以降から現代に到る期間に日本において刊行されたインドに関する単行書をできるだけ数多く発掘し、その全体像を一冊の書誌にまとめることにより、インドに関する地域研究にたずさわる研究者、学生、およびいろいろな分野でインドに関して何らかの文献情報を得ようとする人々の利用に供することである。

1) 松本脩作『インド書誌 明治初期～2000年刊行邦文単行書』東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」2006.3 ix, 452 p. (東京外国語大学大学院21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」研究叢書)

本書は主題別リスト、書名索引、著者名索引の3部から成り、収録点数は人文・社会科学分野を中心とする単行書約5,800タイトルである。

インドという地理的概念について簡単に説明すると、インド亜大陸には古代から幾多の王朝や帝国が存在した。近世に到ってイギリスをはじめとする西欧諸国の植民地となり、1947年にインドはパキスタンと分離独立した。現在の南アジア諸国の中からパキスタン、アフガニスタン、ネパール、ブータン、スリランカ、モルディブを除く地域である。歴史的にはインドの地理的範囲は変化しこれら諸国と重複することもある。

明治以降の刊行物に限定して収録したことについては、日本とインドとの関係がそれまでの間接的なものから直接的なものに移行した歴史的变化があり、それにともないインドに関する出版物の内容や量もそれ以前に比べて大いに变化したという事情がある。

明治以前の時期におけるインド情報は仏教を中心とするものであった。初期の奈良時代には中国や朝鮮半島を経由して、後に江戸時代には長崎を経由してもたらされた印刷物を通して間接的に伝えられ、国内に広がった。明治に到る長い期間にわたって、日本では唐・天竺・本朝の三国をもって世界認識の基本とする時代が続いた。

明治以後の状況はそれまでとは大きく異なり、日本とインドの直接的な交流が可能になった。インド社会のあらゆる分野に関する情報が得られるようになり、かつ同時代の最新情報が大量に流入するようになった。欧米の書物を翻訳して情報を得ることから始まって、自らインドを実地に体験し、その結果を印刷し発表するという過程が急速に進んだ。またインド人による著作の紹介もだんだんと行われるようになった。この新たな段階に入った明治期から本書の収録時期を開始した。

本書に収録されている文献が網羅的であるかという点については、編者として未だ不完全であることを認めざるをえない。にもかかわらず、なぜこの時点で刊行したのかという理由は、図書館や文庫・個人コレクションなどで未調査のものが多いけれども、これらをすべて個人で調査することには明らかに限界がある。その限界を理由に刊行を

遅らせるよりもあえて現時点での結果を公刊し、将来の改訂を目指すことの方が大切であろうと考えた。

膨大な量の仏教関係文献の中で、教理上の問題や経典研究や釈迦研究の文献について、日本とインドの関係という視点から収録の適否を判定することは筆者の能力を超えるものである。従って仏教研究、仏教学、経典類、釈迦やその弟子達に関する伝記資料は採録しなかった。仏教説話や仏教文学作品も除外した。

ヒマラヤという地域概念があり、その中にインドの一部も含まれる。この地域に関する登山・探検関係の出版物は膨大な数に達する。これについては薬師義美著『ヒマラヤ文献目録』という優れた書誌があるので採録対象から除外した。²⁾

ヨーガに関する文献も採録対象外とした。ヨーガはインドから伝えられたものであり、現在もヨーガをめぐる交流は盛んである。ヨーガに関して書かれた多くの資料のなかで、どれをインドに関係するものとし、あるいはそうでないものとするかを判断することは困難であったのがその理由である。

日本文学の中に現れるインド像・インド人像是様々な形をとっている。小説の世界の中でインドが舞台となったり、インド人が主役として出てくることがある。日本人作家による小説の中のインドやインド人をどのように考えるかは非常に難しい問題である。それらは除外した。またインドを舞台とする短歌・和歌・詩集も除外した。

ただしインド人と欧米人作家の作品で日本語に翻訳・紹介されたものは収録した。また民話、童話、神話なども収録した。

文献探索の便をはかるために以下の方策を講じた。

書名についてどれが主たる書名か副次的な書名であるか紛らわしい場合には、「別タイトル」のもとに本文に記述し、索引でどちらも検索できるようにした。戦前期の出版物には特に紛らわしいケースが多い。

団体出版物については、団体名を主標目とし、個人名は書名の次に記述した。著者名索引では団体名からも個人名からも検索できるようにした。

2) 薬師義美『ヒマラヤ文献目録』 新版(増訂3版) 白水社 1994 1320 p.

著者標目としての外国人名はローマ字表記で統一した。理由は時代によって人名表記が変化し、配列に影響を与えることである。例として Mohandas Karamchand Gandhi はガンヂー、ガンジー、ガンディーなどと書かれている。これらの違いは著者名索引の中で「を見よ」参照を付してローマ字表記のもとに統一した。この方式を採用したことにより、著者名の配列基準をアルファベット順とした。

上記の理由により配列の基準をアルファベット順とし、本文、書名索引、著者名索引の全体に適用した。翻字表は付表として掲載した。

(2) インド研究における戦前と戦後 研究と資料の断絶

明治以後の日本におけるインド紹介はさまざまな形で行われた。それらが集積されて日本国内におけるインドにたいする知識や認識は発展してきた。インド研究は東洋学研究の中で重要な一角を形成した。歴史、言語、政治、経済、宗教、文学などの諸分野で発展をとげてきたが、第二次世界大戦の敗戦で大きな挫折を見た。研究が主として進められてきた大学や研究機関が大きな変化に見舞われたと同時に、多数の研究者にとって研究の場が失われた。東亜研究所、満鉄調査部、満鉄東亜経済調査局、南洋経済研究所、総合インド研究室などが解体され、研究の場に大きな断絶が起こった。同時にそれらの機関の図書館で所蔵されていた文献も散逸した。戦後この断絶からの立上りにはかなりの時間を要した。また研究システムが消滅したことにより、研究者相互の人的学術的交流が途絶えた。戦後に再出発した世代の研究者は、研究上の継続性が失われただけでなく、資料面での喪失に直面して、研究活動を開始するのにパイオニアと同様の苦闘を強いられた。

このことは図書館の分野でも深刻な影響をもたらした。1923年の関東大震災による資料の破損と焼失は膨大なものであった。特に関東地域の図書館の多くがこの被害にあっている。さらに戦災による図書館蔵書の解体・焼失は全国的なレベルで起きたのであり、日本の図書館界に未だに回復できない傷をのこしている。戦前期に刊行された資料とそれに関する情報が不十分だと我々に感じさせる要因のひとつはこの点にある。

明治期から現時点までの日本のインド研究の歴史を知ろうとすると、研究と資料の両面における断絶はいまだに回復されているとは言えない。このような認識にたって資料面の全体像を把握し断絶の一部を多少とも克服しようとすることに本書の主要な目標のひとつがおかれている。

(3) 歴史的にみたインド関係出版物の主要な特徴

(A) 仏教伝来から江戸末期まで

奈良時代から江戸末期までの長い期間にわたって日本におけるインドのイメージは仏教と分ちがたく形成されてきた。釈迦の誕生地で仏教が起り盛んになった地としての西方浄土・天竺は、日本人が一度も行ったことのない未知の地域であった。西域や中国や朝鮮半島を経由して仏教は間接的に伝来した。そのことは単に宗教のみならず文化・学術・芸術など多方面の知識と技術の世界でも同じであった。このような長期にわたる文化の間接的伝来は西方への憧れをかき立て、現在もシルクロード熱の形で続いている。

この間印刷物としては、仏教經典、仏教教義書、釈迦伝、悉曇学（サンスクリット語、パーリ語などの古代インド北部の諸言語学）文献などが数多く刊行されている。また江戸時代中期には航海中に遭難して天竺に到達したという所謂天竺徳兵衛の伝記が残されているが、実際に徳兵衛が行ったのは現在のタイであった。明治以後もこの関係の出版物はいくつかあるが、これらは本書の収録対象から除外した。

(B) 明治から第二次大戦まで

明治になり日本人が世界を見渡した時のインドはいわゆる英領インドと呼ばれイギリスの植民地であった。明治以後日本人が国際関係の中でインドを位置づけようとする時このことは非常に大きな意味をもっていた。政治・経済・文化関係のいずれにおいてもインド政庁の意向を無視しては何事も具体化することができなかった。このような政治的枠組みの中で戦前・戦中の日印関係は発展してきた。日印関係と日英関係が相互に影響しあうことはしばしば起こったのであり、特に政治や経済の分野では顕著であった。印刷物の分野でもインドまた

はイギリスで刊行された資料が情報の大部分を占めていた。その中でも英語文献から得られた情報をもとにインドに関する出版物が作られるケースが多かった。

明治期に刊行された最初のインド史は明治 14(1881) 年に出版された高橋吾良著『印度史』であろう。英語を中心にフランス語・ドイツ語・時には漢書も利用して情報を集め一巻の歴史書としてまとめた巻頭に記されている。³⁾ これに続くのが明治 22(1889) 年に刊行された北村三郎著『印度史』であろう。これも欧文資料を主たる情報源にして編成されている。⁴⁾

近代仏教学は明治開国以来入手が可能になったサンスクリット語(梵語)やパーリ語(巴利語)の原典とチベット語訳など、日本人にとって新しい形態の仏教経典や文献を駆使し、西欧的方法論を取り入れて新たに出発した。宗門的制約を離れて自由かつ批判的な姿勢で、歴史的研究・文献学的研究・教理論的研究の分野で新たな地平を開拓しようとするエネルギーが溢れていた。その最大の理由は明治新政府の国家神道政策によって引起された国家と仏教諸宗派との公然たる緊張関係であろう。幕末の尊王攘夷運動の中で仏教諸宗派は佐幕派の一勢力と見做されていたが、明治政府が国家神道政策を掲げてからは一層その存在が危険にさらされた。新政府との妥協がある程度見通せる時期に至るまでの期間は仏教諸宗派にとっては政治的緊張の連続であった。“廃仏棄釈”政策下に諸宗派は政治的緊張とともに、教学上の試練にもさらされたのである。

皮肉なことには 19 世紀後半の仏教発祥の地インドでは、仏教は長い衰退の時期を経て、その存在自体が非常に小規模に一部の地域だけに残っている状況であった。したがってインド仏教研究をリードしていたのはヨーロッパで、中でもイギリスが最先端にあるという認識が日本の中でひろがった。そこで日本の仏教界は優秀な若者をイギリスに送りはじめた。

西本願寺は明治 5 年に梅上澤融、島地黙雷らの一行を欧州に派遣し

3) 高橋吾良『印度史』 横浜 高橋吾良 明治 14(1881) 126 p.

4) 北村三郎『印度史 (全) 附朝鮮・安南・緬甸・暹羅各國史』 博文館 明治 22(1889) 435 p.

た。それに随行した、赤松連城、光田為然、堀川教阿らは約2年余り滞欧視察を行った。西本願寺からは後に大谷光瑞の一行がインドへ入り各地を訪問している。

東本願寺は明治6年に翻訳局を設置し日本で初めてリグ・ヴェーダの英訳本からの翻訳やベンガリー語文典の訳出を行うなど活発な活動を開始した。⁵⁾ 明治9年には南條文雄と笠原研寿を英国に送り、二人はオックスフォードにおいてF. マックス・ミュラーのもとでサンスクリット語の習得に励むとともに経典に対する豊富な知識を駆使して、師とともに経典校訂を行い、サンスクリット文による『金剛般若経』『無量寿経』『阿弥陀経』『般若心経』『尊勝陀羅尼』を刊行した。また他にもいくつかの業績を残している。

南條文雄は滞英8年近い期間に数多くの業績を発表した。笠原研寿は研究中に結核を患い5年余の滞英生活に区切りをつけて帰国したが程なく死去した。南條文雄の『懷旧録 サンスクリット事始め』によれば、彼の出身地岐阜大垣では慶應2年末の政情不安定な時期に本山の承認を受けて東本願寺系寺院の住職・二・三男を中心とする僧兵部隊が編成され軍事訓練が行われた。西本願寺系の別の部隊も編成されたと言う。慶應4年正月の伏見での戦争に際しては、本山からの特使が来ていわゆる官軍と戦うために上洛するようとの命令をもたらしたが、出兵予定の前日に見合わせの特使が来て急遽派遣中止となり、賊軍になるのを免れたと回想している。南條自身も僧兵の一員として加わっていた。南條とその後の明治政府との関係をみれば、その立場に随分と振幅の大きな変化が見られる。⁶⁾

いわゆる「グレート・ゲーム」(Great Game)の影響も無視できない要素である。開国明治政府が国際政治の中で否応なしに対面したのは19世紀後半の剥き出しの帝国主義戦争の時代であった。国際関係を軍事的な観点から調査する努力が払われた。インドとの関係で見ると、グレート・ゲームの当事国はイギリスとロシアであったが、その舞台はロシアと英領インドとに挟まれたイラン、アフガニスタン、中

5) 渡邊顯信『翻訳局と本邦初訳リグ・ヴェーダ 東本願寺翻訳局の業績紹介』(『大谷大学図書館報』第6号 昭和62年5月 p. 5-16) 黒田行元訳『利慶薛陀』を紹介。

6) 南條文雄『懷旧録 サンスクリット事始め』平凡社 1979 p. 3-11.

央アジア、チベットであった。英領インドは実態的に一方の当事者であった。この舞台となった地域に関して日本陸軍はかなりの調査を行った。グレート・ゲームに対する日本の関心の高さは、それが日ロ関係に直結していたことによる。これらの軍事的な調査結果は公開されない性格をもっており、実態を知ることは今となっては困難であるが、いろいろな形で残された刊行物のなかにアフガニスタン関係の軍事資料が多く残っている。インドの軍事に関する現存資料は少ないが、その代表的なものとして、明治 19(1886) 年における福嶋安正・田内三吉の両陸軍将校のインド紀行がある。⁷⁾

明治 10 年代の半ばから 20 年代終わり頃にかけて T. B. マコーレイによるクライヴ伝とウォーレン・ヘイスティングス伝が数多く出版された。確認できただけでもこの時期に 23 タイトルが世に送り出されている。このような短期間に二つの原本からの翻訳が数多く出版されたのは、当時のベストセラーになったからではないかと思われる。R. クライヴは南インドでフランス勢力やマイソール王国などと戦い軍事的覇権を確立し、さらに 1757 年にはブラッシーの戦いでベンガル太守とフランスとの連合軍を破り、東インド会社の軍事的覇権を打ち立てた人物である。ウォーレン・ヘイスティングスはベンガル総督として植民地行政制度を整備するとともに、徴税制度の改正、裁判制度の確立に意を払った人物である。このようにインドにおけるイギリスの軍事的覇権確立と植民地行政確立を代表する二人の人物の伝記がもて囃されたことは、日本の台湾・朝鮮半島における植民地獲得と中国大陆への帝国主義的進出への流れと無関係であるとは言えないであろう。これらはイギリスの帝国主義を批判するためではなく、むしろ肯定的な立身出世物語として出版されたと思われる。この伝記は英語の教科書としても利用されたようである。これらは明治日本が次第に植民地獲得に動き、帝国主義国家へと変化して行く段階での出版界のひとつの動きを示すものと考えられる。⁸⁾

岡倉覚三天心が日印関係に文化面で寄与した役割は非常に大きかつ

7) 福嶋安正・田内三吉『印度紀行』陸軍文庫 明治 20(1887) 10, 237 p.

8) 嚆矢となるのは Macaulay, Thomas Babington: 『印度顛覆史 (上巻)』(マコーレー 著 山田良作訳) 博聞社 明治 15(1882) 118 p.

たといわねばならない。天心は1902年にカルカッタを訪れ、ベンガルの画家、芸術家、知識人との交流の道を開いた。彼はまたインドの独立運動にも大きな関心をもっていた。「アジアはひとつ」という彼の言葉はその後濫用され手垢にまみれてしまったが、中国とインドでの見聞を中心にそのアジア観は形成されたもので、インドへの関心は以後生涯を通して維持された。タゴール家の人々や周囲の文化人との親密な関係はその後の日印間の文化的交流の出発点になった。タゴール一族のプリヤンバダ・デーヴィー・バネルジー夫人と天心の恋愛書簡集は現在でもなお瑞々しい美しさを伝えている。⁹⁾

R. タゴールがアジア人としては初めて1913年にノーベル文学賞を受賞すると、日本では大きな反響を呼んだ。受賞作『ギーターンジャリ』は早くも大正4(1915)年に翻訳出版され他の作品も続々と紹介された。¹⁰⁾ 以後数多くの著作が戦前・戦後を通して翻訳・紹介された。彼は1916年以来5回日本を訪れて各地で講演会を開いたりして幅広い階層に影響を与えた。彼が日本の中国侵略に対して厳しい批判を展開したことはよく知られている。彼の著作は現在も日本で読まれ続けている。M. ガンディーと並んで日本で最もよく読まれているインド人の一人であろう。

戦前の日本ではインドの独立運動に対する共感と支持が幅広い階層にわたって存在した。その指導者としてのM. ガンディーは早くから注目され、紹介された。¹¹⁾ ガンディーに魅了された日本人は戦前から多く、直接インドに訪問して面会して書いた資料(藤井日達、賀川豊彦、高岡大輔など)や日本人の研究書、外国人の著作翻訳(ロマン・ローラン、C. F. アンドリュースなど)から大量のガンディーに関する

9) 岡倉天心『宝石の声なる人に プリヤンバダ・デーヴィーと岡倉覚三 愛の手紙』平凡社 1982 271 p. 1997年には『平凡社ライブラリー』版で刊行された。

10) 『ギーターンジャリ(歌の祭賛) 印度新詩集』(増野三良訳) 東雲堂書店 大正4(1915) 30, 9, 228, 31 p.

11) 饒平名智太郎『ガンヂ審判の日』改造社 大正11(1922) 6, 4, 224, 2 p.

茂森唯士『ガンディ及びガンディズム』日本評論社 大正11(1922) 4, 6, 197 p.

『ガンディ論集』(岩下三良訳) 日本評論社 大正11(1922) 6, 80, 241 p. などが大正11(1922)年以後紹介され始めた。

高田雄種訳『ガンヂー全集 第1-5篇』春秋社 昭和2-5(1927-1930) 5冊 自叙伝を含む相当量の著作を翻訳したもの。

る情報が流入した。非暴力主義の政治思想とインドの広範な階層の民衆を独立運動へ動員する政治手法、さらに断食と政治的要求とを組み合わせる方法は日本人を驚かせ鮮烈な印象を喚起した。聖人、聖雄という受け止め方が日本で一般化した、彼の日本の帝国主義的膨張政策に対する鋭い批判についてはあまり紹介されていなかったのではないだろうか。

J. ネルーも早くから注目されていたが、彼の著作は戦時中から出版され始めた。¹²⁾ しかしむしろ戦後になって多くの著作が翻訳され、また伝記などによって日本社会によく知られるようになった。1949年子象インディラの上野動物園への寄贈、1952年締結の日印平和条約における賠償請求権の放棄などを通しての一貫した対日友好政策とともに、米ソ冷戦時代の国際政治の場における非同盟諸国の旗手の一人として、ネルーは日本で広く受入れられた。

中村屋のボースとして知られる R. B. ボースは日本に政治亡命し多くの著作を発表した。インド独立を訴える政治的著作と並んで民話や神話の紹介なども行った。戦後においても彼に関する伝記的資料は相馬黒光やいろいろな人々によって書かれている。

戦前の在日インド人による独立運動に関しては、神戸の在日本印度国民會が発行していた雑誌「Voice of India」があった。このバックナンバーは未発掘で、不揃い版がニューヨーク・パブリック・ライブラリーで所蔵されている。そのマイクロフィルム版は日本の図書館でも見ることができる。一部の号では英語・日本語併記のものがあり、完全版を作り上げることができれば資料的価値も増すことであろう。¹³⁾

同様に日本に亡命した人々の中では A. M. サハイ、A. M. ナイル、M. プラタブなどの書いたものが見られる。

12) J. ネルーの著作「印度の統一」(松本慎一訳) 育生社弘道閣 昭和 17(1942) 5, 3, 305 p.

『ネール自叙傳 印度の最近の事象に關する願想』(竹村和夫、伊與木茂美共訳) 國際日本協會 昭和 18(1943) 2 冊

『娘インディラへの手紙』(第 1 部)(第 2 部)(脇山康之助訳) 豊國社 昭和 17(1942) 2 冊

13) 「Voice of India」誌のマイクロフィルム版はアジア經濟研究所図書館と東京外国語大学図書館で所蔵されている。

S. C. ボースはチャンドラ・ボースの名前で有名である。第二次大戦中日本政府の支援により結成された自由インド仮政府の首班となりインド国民軍 (Indian National Army) を率いた。彼の死因についてインド国内では疑問の声があがりインド政府は何度か調査委員会を設置しその度ごとに報告書が公開されている。日本では戦時中に彼の著作が自伝をふくめていくつか翻訳紹介された。戦後にも彼に関する伝記的資料がいくつか刊行された。またインド国民軍の創設・展開にかかわった藤原機関や光機関の関係者による回想録や談話記録などは戦後刊行され、研究書も出版されている。¹⁴⁾

インド国民軍に関する日本政府の公的資料は非常に少ない。第二次大戦中に日本軍が占領統治したアンダマン・ニコバル諸島に関する公的資料も残っていないようである。これらに関する資料について今後国内外での発掘調査が行われることを期待したい。

第二次大戦中のインパール作戦における日本軍とインド国民軍の惨敗と多大の死傷者をもたらした悲劇は日印関係史上忘れる事のできない出来事である。これに関する膨大な資料の中からどれを選択し本書に収録するかについての基準を設定することは筆者にとって非常に困難な問題であった。インドとビルマの国境を挟んでの戦闘はインパール作戦と呼ばれているが、これは決して孤立した戦闘ではなかった。東南アジアにおける戦争や重慶政府と対峙した日中戦争の一部として連動した戦線であった面もあった。ビルマにおける戦闘にも時期的にいろいろな段階があり、地域も各方面にわたる。残された文献の中でも、異なった角度からいろいろな地域が取り上げられていて、インパールやアラカンの国境地帯の戦闘に全く触れていないものも多い。そのような事情を勘案して、本書ではいわゆるビルマロード問題、インパール・アラカン地帯における戦闘、インド国民軍、日本軍将兵の捕虜、戦後の遺骨収集に関して相当の記述を行っているものに限定して収録した。この地域の戦闘に参加し帰還することができた人々によって書かれた資料は非常に多いが、その全体像を知ることが困難である。戦

14) アジア経済研究所『南アジアの民族運動と日本』（長崎暢子編）1980 229 p.

外務省アジア局第四課『スバス・チャンドラ・ボースと日本』昭31(1956) [4] 235 p.
藤原岩市、国塚一乗、スバス・チャンドラ・ボース・アカデミーなどによる回想録もある。

友会や個人によって戦後各地で多くの資料が印刷刊行されたが、非売品が大部分を占め、関係者の間でのみ配布されたものが多いと思われる。記録を残したいという願いで作成されたものであろうが、多くの場合それを国立国会図書館や各地の公共図書館や大学図書館に寄贈するというにはならなかったようである。戦前の部隊編成は出身地単位で行われたので、戦後の戦友会も大多数は出身地中心に作られ、多くの場合限られた地域内で配布されたものと思われる。したがってこの種の資料は各地の県立図書館や市立図書館などでの所蔵に期待しなければならないが、そのための調査に要する時間と労力は膨大なものになろう。

第二次大戦から帰還した将兵による各種資料を組織的継続的に収集している図書館は少ないようである。ネット上の所蔵調査では奈良県立図書館が比較的多くの資料を所蔵している。

戦前戦後を通して日本人のインドに対するイメージ形成に大きな影響を与えたのは R. キプリングの作品であろう。『ジャングル・ブック』や『キム』、短編小説や詩集などが明治期から紹介され今に到るも衰えをみせない。特に少年少女のための読み物には『ジャングル・ブック』がしばしば登場する。子供向けの読み物の世界では、仏陀と仏教説話、偉人物語の中の M. K. ガーンディーや詩人で思想家のタゴールと並んでインド・イメージ形成の主役の一人である。宗主国イギリス側から見た植民地インド・イメージが文学作品を通して移植された典型的な例といえよう。現在も依然として子供の読み物の世界で大きな一角を占めている。

第二次大戦が開始されると戦争遂行のための各種情報が必要になってきた。戦争当事国に関する軍事情報とともに、日本が初めて軍隊を展開し実際の戦闘行為を行う各国・各地域に関する社会・経済・政治・歴史・法律・地理・言語・歴史・文化など広範な分野の情報が必要になってきた。特に東南アジアや南アジアについては情報の不足が深刻であった。この情報不足を短期間でカバーするために既存の研究機関や研究者または報道関係者などを大がかりに動員し日本国内での自前の調査研究を進めて、その成果を利用するという形での戦争努力が行われた。

調査・研究に要する人的・資料的資源は当時の日本の状況では明らかに貧弱なものであったと言えるのではなからうか。そのような制約条件のもとで採られた方策は、諸外国で刊行された代表的な学術的著作を急遽翻訳し、情報資源として活用しようとするものであった。そのために戦時中で諸物資が不足し、印刷用紙も一般の市場では大いに供給量が減り品質も低下している中で、日本人による自前の研究成果とともにこれらの翻訳された学術的出版物に対しては、優先的に用紙が割当てられた。出版物の中には発行部数が奥付に明記されているものもあり、5000部、3000部、2000部などと現在の基準で考えても相当多量に印刷されたことがわかる。これらの翻訳の成果を今になって振り返って見れば少なくともインドに関してはかなり貴重な著作が選択されていることに気付くのである。

例えば経済学分野のみを見ても、インドで最初の計画経済書といわれる M. ヴィスヴェスヴァラヤの作品が抄訳ではあるが『印度の経済構造』という標題で刊行されている。D. R. ガドギル『近世インド産業發達史』、D. H. ブカナン『印度の近代工業』、L. C. A. ノールス『イギリス植民地經濟史』、V. アンステイ『印度經濟の研究』、R. ムケルジ『印度農業經濟論』、R. ムーケルヂ『印度海運史』などが刊行されている。これらは戦後のインド經濟研究の中でも資料的価値をもっていたと言うことができよう。¹⁵⁾

-
- 15) Visvesvaraya, Mokshagundam『印度の經濟構造』(M. ヴィスヴェスヴァラヤ著 岡倉古志郎訳) 綜合インド研究室 昭和18(1943) 3, 333 p.
Gadgil, R. R.『近世インド産業發達史』(D. R. ガドギル著 鈴木正四訳) 慶應書房 昭和18(1943) 13, 458 p.
Buchanan, D. H.『印度の近代工業』(D. H. ブカナン著 岡倉古志郎訳) 河出書房 昭和18(1943) 4, 2, 4, 8, 793, 48 p.
Knowles, L. C. A.『イギリス植民地經濟史 第1-2巻』(L. C. A. ノールス著 岡倉古志郎、前橋正二訳) 栗田書店 昭和18-19(1943-1944) 2冊
Anstey, Vera『印度經濟の研究』(アンステイ著 末高信訳) 有光社 昭和17(1942) 2, 2, 15, 554 p.
Mukerjee, Radhakamal『印度農業經濟論』(R. ムケルジ著 綜合インド研究室訳) 綜合インド研究室 昭和18(1943) 2, 6, 323 p.
Mookerji, Radhakumud『印度海運史』(R. ムーケルヂ著 松葉榮重訳) 帝國書院 昭和18(1943) 237 p.

(C) 戦後の状況

占領下の日本人にとって 1947 年のインド独立は大きな出来事として迎えられた。ガンディーやネルーなどを指導者とするインドの独立運動は長い間日本の世論の中で注目されていた。また戦争中のインド国民軍の動向に関する情報もかなり広範に流れていた。そのような要因があり戦後の日本では一般的にインドは好感をもたれ友好的な雰囲気にあったと言うことができよう。独立インド政府は国際政治の場では非同盟政策を掲げ、国内的には社会主義型社会の建設と計画経済の推進を目指していた。日本との 2 国間関係では、戦争中のアンダマン・ニコバル諸島占領や東部のインド・ビルマ国境地帯における悲惨な戦闘があったにもかかわらず、賠償請求権を放棄し新たな友好関係樹立への姿勢を示した。初代首相の J. ネルーはもっとも歓迎された外国人政治家の一人であった。彼の自伝や『父が子にかたる世界史』などが戦後も翻訳紹介され、現在も版を重ねている。また彼に関する伝記的文献の数も相当に多い。

極東国際軍事裁判における R. パール判決書に関する議論は日本国内でいまだに継続している。第二次大戦における日本の立場を擁護しようとする立場から、パール判決書を重視する保守派の文献が多い。

第二次大戦中に捕虜となりインドのビーカーネールや一部はクエッタ（現パキスタン）に収容されていた兵士に関する文献は非常に少ない。さらに文献の発掘を進める必要があるだろう。また同時期にマラヤ、シンガポール、ビルマ、インド、セイロンなどに滞在していた日本人約 3 千人は敵国市民として強制抑留された。初期にはニューデリー市内のプラーナー・キラーに、その後現ラージャスターン州のデーオリーに収容された。この事実に関する文献も非常に少なく、インド関係者の中でもあまり知られていないと思われる。強制抑留された人々が帰国後結成した親睦団体「インドワラ会」の中で配布された『インドワラ通信』は、東京外国語大学大学院 COE プログラムによってマイクロフィルム保存版と複製版が作成され、公開利用に供されている。また同会メンバーによるスケッチ集などの資料もマイクロフィルムによ

16) 『インドワラ通信』第 1-38 号 1966.12-1988.5 大和市 木村二郎編集発行 複製

る保存と複製版の作成が行われた。¹⁶⁾

戦前・戦後を通じて目を引く現象のひとつは膨大な量の紀行書である。特に戦後の一時期から出版点数が上昇しているが、インド紀行書は途絶えることなく増え続けている。それらに共通するのは日本とは非常に異なる多民族社会とその多様な生活や習俗に対する驚きを書き記していることである。生まれて初めて強烈なカルチャー・ショックを受けて、自分の胸の内に収めておくことができず他の人々にも伝えたいというレベルの驚きであるようだ。

これと同様に数が多いのは仏教遺跡への紀行書であるが、この場合は執筆者が僧侶、仏教徒である。日本仏教徒の巡礼の旅の記録という特徴をもっている。この傾向は今後も続くと予想される。

インド料理の本は数としては多くないが出版されている。カレーはインドから伝えられたのか、イギリスからかという問題は別にして、インド料理に対する日本人の興味は強まっているし、食生活の中に少しずつ入り込んできているようだ。

特異な出版物としては、ラジニーシ及びJ. クリシュナムルティによる著作の翻訳文献である。それぞれを宗教指導者として仰ぐ教団やそのメンバーによって日本語に翻訳された文献の数は驚くほど多く、1970年代から継続して出版されている。それらは教団の内部または周辺で流通することが多かったと想像されるが、商業出版社から発売されているケースも見られる。このことは教団の外部にも一定の需要があることを伺わせる。オーム事件に象徴される日本社会内の既存宗教に入りきれない部分がこのような教団によって取り込まれているようである。

カルカッタ（現コルカタ）で貧しい人々のために長い間奉仕活動を行いノーベル賞を授与されたマザー・テレサに関する本が多数継続的

版とマイクロフィルム 35 ミリ版を東京外国語大学図書館で所蔵。その他の関連資料として、インドワラ会『スケッチが語る印度抑留記（1941.12.8-1946.5.19）』大和市 1982 112, 2 p.

澤谷友美『遠き空をみつめて 母・伊香房子』八戸 1996 214 p.

峰敏朗『インドの酷熱砂漠に日本人収容所があった』朝日ソノラマ 1995 340 p.

昭南特別市『馬來、ビルマ及印度在留邦人抑留者名簿』1943 224 p.

に出版されている。彼女の活動は多くの日本人に注目され敬意が払われている。彼女に関する本の多くはキリスト教関係団体から出版されているが、商業出版社からも相当数が刊行されている。

文献の存在自体に関する情報を得るのが難しい分野のひとつとして、対インド経済協力分野で活動しているいわゆる NGO・NPO 団体が作成する印刷物がある。これらについてはその実態を知ることが難しいが、印刷物を重点的に収集し公開している図書館は現時点では存在していないと思われる。納本制度が機能して諸団体から国立国会図書館にその多くが納本されているとは思えない。どこかの図書館が意識して収集に努力し、後世に資料として残す必要があると思われる。

同じような意味で図書館が意識して収集しなければならない種類の文献として、在日インド人の人々が作成・流通させている各種印刷物がある。在日インド人の数は増えつづけていて、彼らの間では英語・ヒンディー語などによる印刷物の種類が増えていると思われる。これらは邦文文献ではないが、日本の現代社会の一面を示す貴重な資料であることは疑いない。英語やヒンディー語以外の言語による資料もまた重要である。これらを意識的に収集・保存して公開利用に供する図書館がぜひ存在してほしいと考える。

この書誌に設定した 2000 年までの収録期間を過ぎて 21 世紀に入ると、中国・ブラジル・ロシアとならんで経済大国として浮上し始めたインドに関して、日本のマスコミは注目度を強め、出版物も増えている。ある種の「インド・ブーム」が起こりつつあるかのごとくである。国際経済における大市場としての可能性と国際政治における核保有国としての大国インドのイメージが日本で広がりつつある。経済や政治の分野以外でもインドに関する関心は高まって、多くの出版物が見受けられるようになってきた。中にはインド式計算術に関する入門書が短期間に何点も出版されるような現象も見られた。これらの出版物は急速に変化しつつあるインドの姿を伝えようとするものが多い。多様で複雑なインド社会がどのような変化をとげようとしているのか、多角的な冷静かつ注意深いアプローチが必要であろう。

なお戦後の日本におけるインドに関する社会科学・人文科学分野での研究については、時間の制約もありここで特に触れなかったが、研

究史と関連文献についての調査がアジア経済研究所などによって継続的に行われてきたのでそれを参考にしていきたい。また歴史学の分野では前年に印刷発行された個別の学術的な成果を紹介し、書誌的な情報を合わせて提供することが『史學雑誌』上で毎年行われている。このような研究サーヴェイは図書館側にとって大いに役立つ資料情報源となっている。¹⁷⁾

(4) データベース時代における基本的な文献情報源の状況

(A) オンライン検索で必要な文献情報は得られるか。

現在の図書館における文献に関する情報源としてのオンラインデータベースは、従来の伝統的な冊子体の書誌・目録・索引類に較べると、一層重要性を増している。データベースの収録範囲も広がり、検索のための工夫も改善され、全体として充実してきている。国立国会図書館の所蔵データベースや雑誌記事索引データベース、国立情報学研究所の総合目録データベース、その他の図書館の所蔵目録データベースなどは我々が資料を探索する際に有用なツールである。けれどもこれらのデータベースを利用すればインドに関する過去の印刷物について完全な情報が得られるかどうかという視点から見ると、多くの問題がある。

国立国会図書館の蔵書目録データベースの場合は、明治以後から戦後暫くの時期まで旧漢字を使用した印刷物に関する記述が、戦後の当用漢字を基本に行われているので、旧漢字の表記において全く歴史性¹⁷⁾ 第二次大戦後の日本におけるインド研究の歴史と成果については次の資料が有用である。

アジア経済研究所『日本における発展途上国の研究 『アジア経済』100号記念特集』1969 272 p.

アジア経済研究所『発展途上国研究 70年代日本における成果と課題』1978 130, 279, 19 p.

アジア経済研究所『発展途上国研究 日本における成果と課題』1986 1冊

アジア経済研究所『地域研究論』(山口博一著) 1991 vi, 172 p.

アジア経済研究所『南アジア』(経済)(政治・社会)(佐藤宏編) 1991 2冊 (地域研究シリーズ 7, 8)

『史學雑誌』では毎年第5号で「回顧と展望」を掲載し、前年における日本歴史学界の地域別研究サーヴェイを行っている。貴重な文献情報が得られる。

を失っていることを指摘しなければならない。また頁数などの表記や翻訳書の場合の原書名の記述が不完全であるなどの多くの問題を残している。全国の都道府県立図書館における蔵書の総合目録としてのデータベース UNICANET はアクセスポイントがあまりに限定されていて専門的な検索に不向きであることを指摘しなければならない。けれども都道府県立図書館の中には戦前の資料を所蔵している可能性が高いところもあるので、そのような図書館によるデータ入力作業の一層の進展が期待される。

国立情報学研究所の NACSIS Webcat は収録データが確実に増加していて、各データの書誌情報も信頼性が高いといえよう。けれどもいくつかの問題点がある。そのひとつはこのデータベースへ慶応大学図書館や早稲田大学図書館のような歴史もあり蔵書内容も豊かな図書館が参加していないことである。さらに参加図書館の蔵書データ登録の作業が一般的には最近の入手資料を優先して行われ、既蔵の古いものが後回しにされている傾向があることである。限られた人員と予算の中で仕事をしている個々の図書館の状況を考えればこのような事態は避けられない。その結果として古い戦前資料についての情報が不十分であるという弱点が残っている。

これと同様の問題点は各地の図書館で特別扱いされている個人の名を冠した文庫や特殊コレクションに含まれる個々の文献情報の入力状況である。これらについては目録が作られていることもあれば未作成のケースもある。これらが NACSIS Webcat に登録されているかどうか、登録されていない場合にはその図書館の目録データベースに登録されているかどうか、このことを確認するだけでも相当の時間と労力を要する。貴重な文献がこのような文庫や特殊コレクションの中に眠っている可能性は非常に高い。大きな未発掘の鉱脈のひとつとすることができよう。

以上述べたような理由によってインターネット時代にも個別の主題に関する冊子体の書誌・目録・索引類の作成・刊行が必要な状況は変わっていない。地域研究の分野ではまだこれらの埋められていない空白部分が多い。社会科学・人文科学の専門的な主題分野でも未開拓なテーマは同様に数多い。

(B) 既存の基本的な冊子体情報源の現状

では既存の主要な冊子体情報源の状況を次に概観してみよう。

京都大学人文科学研究所編『東洋學文獻類目』は地域研究分野の年刊書誌としては最も古い歴史をもっている。昭和 9(1934) 年版から現在まで二度の改題を経過しているが、現在も冊子体で毎年刊行されている。日本の東洋学関係の代表的な書誌として知られる。カバーする地域は中央アジアと南アジア以東のアジア。採録対象文献は日本語・中国語・朝鮮語およびヨーロッパ諸語で書かれた論文（雑誌記事）・単行書。主題分野は人文科学を中心に社会・経済・政治・法制・科学も含む。日本語・中国語・朝鮮語文献をよくカバーしているとともに、ロシア語を含むヨーロッパ諸語文献に関する情報提供にひとつの特徴を指摘できよう。¹⁸⁾

東方学会が 1954 年版から 1996 年版まで刊行してきた『東方學関係著書論文文献目録』も重要な情報源であった。カバーする地域はアジア・西アジア（中東）及びアフリカ。採録対象文献は日本語で刊行された単行書と論文（雑誌記事）。主題分野は歴史・宗教・哲学を中心とした人文科学と日本と各国関係など。記述の形式も著者名のローマ字表記とタイトルの英語訳を付けて、対外的に日本における東洋学の成果を毎年紹介する役割を担っていたが現在は休刊状態である。¹⁹⁾

アジア経済研究所図書館編『発展途上地域日本語文献目録』は日本における地域研究の分野で単行書・雑誌記事（論文）の形で刊行された文献を毎年採録・編集したものである。アジア・中東・アフリカ・ラテンアメリカ・オセアニアをカバーし、各地域・各国に関する地域研究の成果と関連文献を探索したものである。1980-1993, 2000-2004 年の年刊版が出版されたが、以後刊行されていない。

このように地域研究分野で代表的と思われていた冊子体書誌類の中で生残っているのは京都大学人文科学研究所『東洋學文獻類目』のみである。日本の図書館界が過去 10 年ないしは 20 年にわたって書誌

18) 昭和 9-35 年:『東洋史研究文獻類目』; 昭和 36-37(1961-62):『東洋學研究文獻類目』; 昭和 38(1963)-:『東洋學文獻類目』

19) 東方学会編『東方學関係著書論文目録』; Books and Articles on Oriental Subjects Published in Japan 1954-1996.

編成事業の分野で後退を続けてきたことは明白であろう。文献情報獲得のための基本的なインフラストラクチャーが失われることの影響を長期的視点からみた時に深刻な打撃を予想せざるをえない。未発掘の過去の文献情報追及とともに現在の文献に関する網羅的な情報収集努力が行われる必要があるだろう。けれどもカレントな文献に関する組織的な情報収集と編纂・公刊事業が基本的なところで壊れて行く現状にわれわれは直面している。なぜこのような後退が次々におこったのかは本稿で取扱うにはあまりに大きな問題である。我々が刊行を中止せざるをえなかった『経済学文献季報』の問題も大きな同じ歴史的流れの中で考え位置づけなければならないのではなかろうか。

(C) 文献情報の網羅性と書誌情報の精度向上

上記のように冊子体情報源がだんだんと姿を消して行く状況が今後もしばらくの間続くであろう。一方ではインターネット上の有力なデータベースに古い文献の遡及入力や階層構造の複雑な文献（論文集など）の入力方法の面で急激かつ劇的な進展が期待できないと思われる。このような状況にあっては、ある主題分野やテーマに関しては個人またはグループのレベルで未発掘文献を探索しながら書誌を作成し公刊して行く以外の道は考えられない。

未発掘文献を探し出す仕事では、特に明治期・大正期・昭和戦前期・戦後暫くの次期に刊行された文献について未だ多くの課題が残されている。これらの文献の発掘によって情報の網羅性を高めるとともに、現物を手にとって点検する作業を通して書誌情報の精度を高めることも大きな課題である。

(5) 今後の課題

(A) 未発見・未収録文献の探索

未発掘資料群のひとつは政府刊行物である。この発掘事業には中央省庁、都道府県レベルの図書館・公文書館所蔵資料を調査する必要があるが、第二次大戦による焼失とともに敗戦を受けて処分されたものが多いのではないかと考えられ、あまり多くの成果を期待することはできないように思われる。むしろ都道府県レベルの図書館・公文書館

や大学・研究機関の図書館において一般蔵書とは別に、個人名を冠した文庫や特別コレクションの形で所蔵され、その内容が目録化されていないもの、または冊子目録化されていても一般的に知られていないものの中に相当の未発掘文献が存在するであろうと推測できる。また寺院や神社の大きな組織がいろいろな形で所蔵する文献群はそのほとんどが総合目録やデータベースのネットワークから外れている。成田山仏教図書館で『日印協會々報』の初期の号が所蔵されていて、同図書館の協力をえてこの雑誌のバックナンバーを揃えることができた経験がある。²⁰⁾ 日本の各種図書館の中でも寺社関係図書館の所蔵する文献には注目すべきであろう。

(B) 雑誌記事索引などの情報源

今回各種文献の中で採録対象に入れなかったものは雑誌記事と外国語で刊行された日本人の著作物である。

雑誌記事についてはいくつかの索引がある。その代表的なものとして国立国会図書館のデータベース『雑誌記事索引』がある。1948年以後のものが採録対象になっているが、それ以前の時期については替わりになるような索引のデータベースが今のところ存在していない。このことは日本におけるインド研究史を行う場合にひとつの大きな隘路になっている。明治初期から第二次大戦後までの時期をカバーする索引の出現が待たれる。

インドに関して外国語で刊行された日本人の著作物に関する書誌も今後の課題である。岡倉天心や河口慧海などの著作の一部が英語で出版されていることはよく知られているが、その他の人々の著作を含めた全体像を知ることは困難である。その探索には相当の時間を要するだろう。

20) 松本脩作『「日印協會々報」 未発見号の所在判明について』（『史資料ハブ地域文化研究』（東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム）No. 2 Sept. 2003 p. 103-110）

松本脩作『「日印協會々報」と『印度甲谷陀日本商品館館報』の公開利用を開始 日印関係史研究のために』（『史資料ハブ 地域文化研究』（東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム）No. 3 March 2004 p. 96-98）

おわりに

私にとって大事な勉強の場であり、かつ情報入手の場でもあった経済資料協議会がその長い歴史を閉じることは実に残念なことである。『経済学文献季報』は私の書誌学への知識を養成してくれたし、他の図書館の人々とともに共通のルールのもとに作り上げてゆく書誌類の大切さと、研究者や学生に大きな情報源を提供してゆく社会的な役割に参加している喜びを与えてくれた。諸先輩や会員の方々に対する大いなる感謝の気持ちをこの場をかりて申し上げたい。そしてまた将来それほど遠くない時期に次の世代の図書館員と研究者が変化する環境の中で新たな組織を作り共同して学術の世界に貢献する活動を再開してくれることを切望する。